

構造医学ニュース

(1997年9月～1997年11月)



第2回日本構造医学会学術大会が開催 貴重な研究発表が相次ぐ

日本構造医学会は10月25・26の両日、熊本市のリバーサイドホテルで、第2回学術大会を開催した。参加者は昨年の第1回を大幅に上回る約60人。学会としてはまだ発足したばかりだが、この一年間で着実に発展してきているといえる。

学術大会では1日目、吉田勸持会長のあいさつ後、まず、日本構造医学研究所の大塚理可臨床部長が、「恥骨クランク運動における荷重位（立位）と非荷重位（臥位）での各状態における比較と臨床上有用な判断への応用」と題して研究経過を報告。続いて、東京で歯科医院を開業する衣川玉郎氏が、「生体咬学の理論と実践」をテーマに、本誌第2巻第4号（昨年12月発行）に発表した生理的咬合誘導・調整法に関して、その後の研究成果を踏まえて報告した。

1日目の最後は、香川県普通寺市で接骨院を開業する大平篤氏が、「小児上腕骨外顆骨折の一治験例」について発表し、参加者の注目を集めた。整形外科では上腕骨の外果骨折の完全治癒は非常に難しいとされているだけに、参加者で整形外科医の進英文氏も「整形の専門医から見ても貴重な症例。整形外科専門雑誌に発表する価値あり」と高く評価した。さらに吉田会長からは、「レオロジー特性を応用した筋の整復を含めるべきだったという反省点が残る」との指摘



会長あいさつ後、貴重な研究報告がつづいた

があった。

大会2日目は、水前寺診療所の住岡輝明氏が「癌について」、医学的な概説に構造医学的な見直しを加えながら教育講演を行った。住岡氏は「癌細胞はわかりやすく言えば、きかん坊の悪ガキのようなもの。悪ガキは禅寺にでも送るのがいちばん」と言い切る。つまり、高カロリーの食事をやめ、規則正しい生活をしなさい、というわけである。

2日目の最後は、吉田会長が今大会の総括ならびにさまざまな研究近況報告を行った。研究近況報告では、日本構造医学研究所で十年来研究を続けている脳冷却法について、最近になって注目されるようになってきた全身低体温法による脳冷却療法の問題点や、構造医学的頭部冷却法との違いを指摘しながら研究成果を報告。また、僧坊のような覆いに、冷水を循環させて頭頸部を冷却する「頭頸部冷却装置」の開発器を、今回はじめて紹介した。

なお、第3回大会は来年11月7・8日に熊本以外の地で開催されることになっている。会場は未定。

(大塚、大平両氏の発表内容の詳細は、今号に掲載した。)